



台風一家

長井那寿美

夏休みに入って、一週間がたった。

俺は儼が生えそうな万年床の上で、足を組んだ姿勢で横になっていた。じめじめして薄暗い自室から逃げ出したかったけど、他にいい場所があるわけじゃない。

去年の春に高校入学祝いで買ってもらったスマホの画面を、まるで自室から脱出するために必要な地図を探してでもいるみたいに、ひたすらいじっていた。

まだ午後三時前なのに夕方のように日が陰っている。ごーっ、という音に気をそがれ窓の外を見ると、遠くがかすむほどの強い雨が降っていた。午後から急に激しくなった風を受けて、寝転がったままで先端だけが見える庭木がゆさゆさと揺れている。さっきから聞こえている耳障りな音は、風の鳴き声なんだ。

スマホの着信音が不機嫌に唸って、ここからさほど遠くない南西の地域が、大型台風の暴風域に入ったことを伝えてきた。進路予想図を見る限り、我が家も直撃を避けられそうもない。

「ふう」と、思わず出た憂鬱なため息と重なるように、今度はラインの着信音が響く。

《すっげえ風だなあ！ こっちはオヤジと台風対策中！ 今は休憩してコーラ飲んで。冷たくてウマッ！ そっちはどうだ？》

そのメッセージの後ろに、色黒のマツチヨがポーズをとっているスタンプが押されていた。

まるで意味不明だ。

ラインの相手は農業高校で新しく友人になった大悟。スマホのニュースを追うように台風の話題をふってきた。

大悟の家は昔からの農家で、有機農業をやっているうちなんかより規模が大きいから、やることも多いんだろう。裏表がなくてすごくいい奴だ。だけど正直うざい。そう感じるのは多分、こうしてたまに入ってくる、俺は仕事を手伝ってるぜっ、っていうアピールが過ぎるからだ。

そのことを、同じく農家の息子の俺が、ほとんど手伝いをしていないことに対する当てつけのように感じてしまうのは、きっと自分が一方的に悪いのだろう。そう感じてしまうこと自体が、どうにも苛立たしくてならない。だって手伝おうにも、やる気が一ミリも起きないんだから。ほんとにイラつく。

不意に、雨音と風音を縫うようなタイミングで、どたばたと階段を上る大きな足音がしたかと思うと、父さんが部屋の前までやって来た。あまりの騒がしさに、一瞬、台風が家に上がって来たのかと勘違いしそうなほどだった。

「勇登、開けるぞ」

父さんは俺の返事も待たずに、この暑いのに閉めきっていた俺の部屋のドアを、乱暴に開

いた。暑苦しい無精ひげの濃い顔が、余計に部屋の温度を上げる。

「何だよ！」

眉根を寄せて不快を示してみせる俺に、一向に気がつかないふりをして、父さんは一方的に続ける。

「だらだらしてねえで、ちつとは手伝え。お母さんはまだ本調子じゃないんだ」

「ええー、マジかよっ！」

高圧的な父さんの言い分に、自分でも驚くほど不機嫌な声が出た。

「ハウスのビニールを外す。一人じゃ難しいんだ。手伝え」

接近している台風の被害を避けるために、農業用のパイプビニールハウスのビニールを外すらしい。台風が通過した後のニュースでよく見る、風で押し潰されたハウスの無残な姿。そうならないために、しなくてはならない作業だ。俺にだって、それぐらいはわかっている。

いつもなら母さんがその作業を手伝っていた。でも母さんは数日前から風邪を引き、今朝からはもう寝込んではいないものの、この風雨のなか外に出るのはまだ無理だろう。

「いいな、着替えて直ぐ来いよ。雨合羽は勝手口に置いてある」

ぎょろりと俺を一にらみしてから、父さんは部屋の扉の前から去って行った。父さんの雨合羽を脱いだ作業着の背中が、しみ込んだ雨で絞れるんじゃないかと思うほど、ぐっしより

と濡れていた。

「わかったよ。やりやいいんだろう！」

もう聞こえないのを承知で、俺は小声で怒鳴った。父さんといい大悟といい、わかってるのにうるさいんだよ。床にたたきつけられたスパーボールみたいに、跳ね上がっていく怒りのゲージ。実はその怒りの半分が、不甲斐ない自分に向けられていることに気が付いているからこそ、なおさら頭にくる。

けど冷静に考えてみれば、一方的な内容だったとはいえ、こうして父さんと会話するのは久しぶりだ。小学生の頃はかなり仲が良かったし、中学生に入ってからだって今よりはずっと話をした。あまり話さなくなったのは、確か卒業後の進路を本気で決めなくちゃならない中三になってからだ。

ちょうどその頃、進路について父さんに聞かれたことがあった。

「勇登は、どこの高校に行きたいんだ？」

責めたりせつたりする言い方ではなく、それはあくまで穏やかな問いかけだったように思う。

「まだはつきり決めたわけじゃないけど、農業高校に行こうかなあ」

父さんが切実な感じじゃなかったから、俺はつい軽い調子で答えてしまった。

「そうなのか？ お前は農業に興味ないと思ってたけどな……」

ちよつと嬉しように、でも戸惑った様子で父さんは聞き返した。

「いや、特別興味があるってわけじゃないけどさ……」

「じゃあどうして？」

「亮介と健人が行くっていうから……」

不審がる父さんに俺はしどろもどろで答えた。その二人は、小学校から仲の良い友達だ。

「おい？ 好きな友達が行くから行くってのか？」

父さんの声色が変わり、ボリュームが大きくなった。

「いや、それだけってことはないけど、普通高校に行くほど勉強も好きじゃないし……」

まずいと思ったけど、もう言っちゃったものはしょうがない。誤魔化そうとしたら余計に悪いことが口から滑り出た。

「農業高校に行けば勉強が楽だと思ってるのか！」

二十メモリくらい、また父さんの声のボリュームが上がった。眉間に皺が寄り、片方の眉だけがつり上がっている。そんな風に、顔を引きつらせて怒る姿を見るのは初めてだった。

「そんなこと言っていないじゃんか……」

ふてくされて、そう小さくつぶやくのがやっとだった。

「俺はそんなことは認めねえ。農業を馬鹿にするなよ」

怒りを通り越したのか、一転して父さんはとても悲しげに言葉をもらした。

今でも、しなびたレタスの葉みたいな父さんの顔を鮮明に覚えている。俺は、この父さんの反応に内心戸惑いを隠せなかった。どう言えば正解だったのかも、全然わからなかった。それから父さんは、ほとんど話しかけてこない。俺からだって、何を話したらいいのかわからなかった。今だって、ずっとわからない。

俺はしぶしぶ汗で湿っぽい短パンを脱いで、ジーンズに着替えた。上は皺だらけのTシャツのままだ。

「頼んだよ。風が強いから気を付けて。お父さんのいうことを良く聞いて」

雨合羽を着て勝手口から外に出ようとする俺に、申し訳なさそうに母さんが気だるげな声をかけてきた。

「わかってるよ！」

俺は収まらない怒りを母さんにぶつけて、暴風雨の荒れ狂う外に出た。

母屋のすぐ裏手に、ビニールハウスはある。間口六メートル、長さ三十メートルのスティールパイプ製のハウスは決して大きくはないけど、我が家にとっては唯一の物で、雨を嫌うミニトマトや、冬の寒い時期にも小松菜などの葉物や何かを栽培出来て、とても大事な施設だ

った。易々と風に潰させるわけにはいかない。

横殴りの風雨を受けて、ばしゃばしゃと水溜りを踏みながらハウスのそばまで行くと、既に作業を始めている父さんが見えた。ハウスの外側に立って、開閉出来るようになっていたサイドに張られたビニールを外している。幸い中学の頃に一、二度だけ手伝ったことがある作業だから、要領はおぼろげにわかる。俺は何も聞かないまま手を貸した。

サイドのビニールが外されていくと、ハウスの中のミニトマトを中心とした野菜たちが激しく揺れ始めた。葉が風に大きくなびき、その度に茎がゆっさゆっさと暴れている。これで屋根に張られたビニールまで取ったらどうなるのか。野菜は風雨でめちゃくちゃになって、もう駄目になるのは目に見えている。急に虚しさが胸に広がった。

とめどなく顔に垂れてくる雨粒をはらいながら、真横で必死に作業する父さんの顔を見た。目に雨が入ってよく見えないせいもあるけど、父さんの気持ちには読めなかった。

父さんと俺はサイドのビニールを外し終え、逃げるように屋根だけになったハウスの中に飛び込んだ。早くも俺の雨合羽は役に立たなくなり、背中から腰にかけて雨が浸みてきている。ずっと前から作業している父さんに至っては、もう雨合羽の意味なんてないんじゃないだろうか。

父さんはうっとうしそうに、その役に立たない雨合羽のフードをはね上げて、ハウスの天

井を仰いだ。俺もつられるように上を見る。

屋根に張られたビニールはばたばたと暴れ、持ち上がったたり、へこんだりを繰り返している。そもそもこんな暴風雨の中でビニールを外すなんて無謀だと、いまさらながら怒りが湧いてくる。本当なら風がもっと弱いうちにやるべきじゃないのか？ 腹の底にへばりついたままの怒りにまかせ、思わず傍らの父さんをにらんだ。

「これじゃあ、危なくてもう外せないな。何とか外さずに済めばいいと思って待ったんだが、考えが甘かった」

俺の胸の内を察したのか、ビニールに雨粒が衝突する騒々しい音に歯向かうように、父さんは大声を張り上げた。

「もっと早くやんなきゃダメじゃん！」

ほとんど叫び声で、俺は文句を言った。屋根のビニールを外すには、高い梯子に登るか、屋根そのものに登らなくちゃならない。こう風雨が激しくてはとても不可能だ。やっぱり判断が遅かったんだよ。

俺の言葉を見越していたように、父さんはビニールハウスの隅に置かれた、長い棒の先にカッターナイフが取り付けられた手製の道具を二本拾った。その一本を俺に差し出す。

「何これ？」

何だか良くわからないままに、俺は反射的に槍に似た棒を受け取った。

「これで内側からビニールを切る。野菜を守りたかったけど、このままじゃハウスが潰れちゃう」

父さんは切腹する武士みたいに固く口を結んで、カチカチとカッターナイフの刃を出した。

「ビニールがもったいなくない？ 結構高いんだろう？」

「いや、もういい加減古いからいいんだ。返って買い替える踏ん切りがついた。気にするな」
言われてみれば、確かにビニールは古びて曇ってきているし、所々に小さな穴も開いている。

「上に登らなくて済むなら、俺ひとりでもなんとかなる。でもせっかく来たんだ、お前も手伝え」

そう言いながら槍さながらに棒を上突き上げ、躊躇なくビニール屋根に切れ目を入れていく父さん。こうすればハウスは風圧を受けなくなり、骨格に被害は及ばない。

「難しくないだろ？ こんな感じでやればいい」

何か所か切れ目を入れてやり方を示してから、父さんは俺の方を見た。入れた切れ目から、早くも雨粒が激しく踊り込んでくる。父さんはさっき外した雨合羽のフードをもう一度頭に深く被った。

「お前は反対側からやってこい。カッターで手を切るなよ」

俺は父さんが指差すビニールハウスの反対側に向かつて、畝間を伝って歩いた。サイドから吹きこんでくる大量の雨で、足元はもうぬかるんできている。

歩く左右の畝の上には、すでに背丈を越したミニトマトの株が伸び、未熟な青色や熟れた赤色をした無数の実が強風にあおられている。今までビニール屋根に守られていた野菜たちがこれからどんな悲運を辿るか想像すると、とても憐れに思えた。父さんが出来るならビニールを外したくないと思った気持ち、良くわかる気がした。あれだけしつこかった怒りが、やるせない気持ちに押し潰されていく。

ハウスの反対側の端に着くと、その付近の一角に、数センチほどの小さな実を着けた長ナスが三株だけ植えてあることに、俺は気がついた。実の形が細長く独特なのですぐにそれとわかった。

そもそもこいつらは、俺が農業高校の実習で育てて植えた苗の残りを、先生に半ば押し付けられるように引き取らされたものだった。

確か五月の中ごろに、高校から持ち帰って庭先に放置してあったはずだ。すっかり忘れていたけれど、ここに植えてあったのか。そう言えばどうするか母さんに聞かれて、適当に植えたというと頼んだ覚えがある。きつと母さんが植えてくれたのだろう。今頃になって、長ナ

スに対してなのか母さんに対してなのかはつきりとしなないけど、罪悪感がむくむくとわき上がってくる。実習とはいえ自分で種を播いておきながら、我ながら無責任だと思った。

俺は、古板からバールで錆び釘でも引く抜くように、無理やり長ナスから視線をはなした。

父さんに指示された通り、カッターナイフでビニールを切り裂いていく。父さんも相当数切れ目を入れたのだろう、ハウスの内風雨が一層激しくなってきた。

やはり気になって長ナスを見ると、ぐらぐらと株元から揺れていた。せっかく実を着け始めたのに、間違いなくこれで終わりだ。大切にしている物を壊してしまった時みたいに、悲しくてしょうがない。……今までそんな風に思ったことはなかったのに。

父さんが反対側からどんどんと作業を進めながら、俺の数倍のスピードでこっちに近づいて来る。こっちがいくら進まないうちに、父さんはすぐそばまでやって来た。

「あの長ナス、もう駄目だね」

俺は、雨音にかき消されそうな小さな声で父さんに話しかける。無気力な自分に対する怒りも、父さんに対する憤りも、土の上で雨に打たれる小石みたいに、すっかり冷えていた。

「ああ、お前が学校で育苗したんだったな。残念だが諦める他ないな」

父さんはフードにこもる声で、寂しげにつぶやいた。

「せっかく来てもらったのに、大してやることなく悪かったな。もう戻っていいぞ。服

は着換えろよ。俺は畑の方をもう一回確認して帰るから」

父さんはそう言いながら俺から棒を受け取って、軽トラが止まっている表庭の方に足早に消えていった。おそらく車で数分かかる畑に行って、出来ることはないか確かめたいのだろう。

俺は滴る顔の雨を手で拭い、長ナスをしばし眺めてから、暴風雨に追い立てられるように屋根を失ったハウスを出た。

勝手口まで戻ったところで、何かに呼び止められた気がして振り返りハウスを見た。ビニール屋根を切り刻まれたその姿は、まるで肋骨がむき出しになった巨大な鯨の死骸みたいだった。

その憐れな姿を見て、俺は急に強烈に悔しくなった。フードを深くかぶり直して取って返し、納屋に行って丈夫そうな支柱と紐を手にはウスに戻る。奥までずんずん歩いて、長ナスの前に立った。

「よし！」

小さく気合いを入れてから、既に倒れかかった三株の長ナスそれぞれの周りに、三角テントのように支柱を刺して、茎や枝を何か所も紐で縛って留めた。まるで手足の複雑骨折に幾つも添え木をした人みたいでかつこ悪い。でもこれで何とか耐えてくれと必死に祈った。し

ばらくは雨に濡れたまま、拳を握って長ナスを見つめた。

その夜。熱帯夜ではないけど、母屋の屋根や壁を叩きつける風雨の音がうるさくて、なかなか寝付けなかった。

日付けが変わる頃が暴風雨の山だと、テレビの気象予報士が言っていた。目を閉じると、長ナスが根元から折れ、小さな紫色の実が千切れ飛ぶ姿が何度もちらつく。出来るだけのことはしたと思うものの、どうにも気になって仕方がない。

一度にトイレに行った時に裏窓から外の様子を見た。真っ暗な中では切ったビニールがたなびく様子がかすかにわかるだけで、中まではとても見えなかった。

思えばこの程度の規模の台風だって、初めて経験するわけではない。今まで俺は幼かったせいもあるけど、まさにどこ吹く風で、野菜の被害のことなんてちっとも気にしてなかった。その時に父さんも母さんも、今回と同じように出来るだけの対策を取っていたに違いない。

それに農業の敵は、何も台風だけじゃない。遅霜の害だって、猪や鹿なんかの獣害だってある。両親は、春先にやつと芽を出したジャガイモを守ろうと、夜遅くに懐中電灯の光を頼りに霜避けを設置したり、秋には猪にサツマイモを取られないように、獣避けの電気柵の点検をかかさなかったはずだ。

でもそれでも、全ての被害を避けることは出来ない。その度に二人はこんな辛い思いをしていたのだと今更のように気が付いた。そんなことにも気がつかなかった今までの自分が、情けなくて涙が出る。

これからどうしたらいいんだろう……。この先もずっと、何をしたらいいかわからないまま、自室で寝ころんで呆然と生きて行くのだろうか。いつも離れない悩みが、より一層強く胸を締め付けた。

母屋の外で吹き荒れる嵐は、俺の心の中までも、めっちゃくちゃにかき乱していた。

いつもならとつくに夢の中にいる時間に、少し風雨が弱まったかな、そう感じた記憶はあるけど、いつの間にか眠ってしまったらしい。目が覚めると、窓の外は明るくて嘘のように静まりかえっている。台風などもう何百年も来たことがないとも言いたげに、憎々しいほどに晴れていた。

慌てて台所に行くと、母さんが朝食の支度をしている。どうやら体調も悪くはなさそうだ。目で探すも、そこに父さんの姿はなかった。

「父さんは？」

あいさつもなしに、俺はだしぬけに聞いた。

「おはよう。今日は早いじゃない。お父さんは、畑を見に行ってる。もう戻ると思うけど」俺はそのまま、長ナスが気になって、着替えもせずにTシャツに短パンで、駆けるように外に出た。背後から、ばたばたと慌てて母さんが付いてくる気配がある。

明るい朝の太陽の下に横たわる鯨の死骸は、一層惨めに見えた。その身体の中に抱え込まれた沢山の野菜たちの茎は折れ葉は千切れ、まるで獣に喰い荒された内臓みたいに無残で、見るに堪えなかった。

ビニールハウスの鉄の骨格が無事なのは有難いと言うべきだけど、野菜を失った虚脱感はずえがたかった。世話をしていなかった俺がこれほど辛いのだ。両親の心を思うと、知らぬ間に涙が出た。

多分俺のことが気になって後ろから付いてくる母さんに、涙を見られたくなかった。心配をかけたくないと思う気持ちと、気恥ずかしさがごちゃまぜになっていた。

俺はビニールハウスの一番奥に向かって、荒れ果てた体内を歩いた。長ナスはどんな悲惨な状態で飛び散っているだろう。見るのが怖かったけど、足は止まらなかった。

俺はすぐに異変に気がついた。長ナスがあるはずの畝の上に、何か茶色の大きな物が三つ乗っかっているのが見える。それは半分に輪切りにされたドラム缶だった。よく見ると、自分が刺した支柱が紐で束ねられ丁寧に脇によけられている。

何だこれは？ 誰がこんなことを？ 頭の中が混乱して、ちょっとしたパニックになった。

「これ、あなたが乗せたの？」

伏せて置かれたドラム缶を見て、後ろにいる母さんも、呆気にとられて口をぽかんと開けている。

「違う。支柱を刺したりはしたけど……」

「ああ、じゃあ昨日の夜お父さんがやったんだ」

母さんが、目を輝かせて何度もうなずいた。

「えっ？」

俺はわけがわからず、その場に固まった。

「夕飯の後にあなたが自分の部屋に行ってから、お父さん、やり忘れたことがあるって暗い中、急に外に出て行ったのよ」

「でも何でわざわざ……。父さんが植えたわけでもないのに」

父さんが野菜を大切に思っているのは知っているけど、この長ナスなんて、うちの全部の野菜の内の一握りどころか一つまみにもならない。そんなちっぽけな物を守って何の意味があるんだろう。

「あら、勘違いしてない？ ここにこれ植えたの、私じゃなくてお父さんのよ。自分で植

えた野菜ならそりゃ気になるでしょ。それに、勇登が育てた苗なんだから余計じゃないかな」

何だか嬉しそうに、母さんは微笑んだ。

「俺が育てたから？」

俺には今一つ、意味がよくわからない。

「そう、小さい時からあなた、捕まえたカブトムシが死んじゃったとか、ほら、一生懸命作ったおもちやのブロックのロボットが壊れちゃったって、よく大泣きしてたから」

「そんなの、ずっと小さい頃のことじゃんか」

声が少し上ずった。こんな時に母さんは何を言っているんだ？

でもいま思えば、幼い頃には些細なことはいえ結構夢中になっていることがあった。父さんも一緒になって夢中になっていた。カブトムシのお墓と一緒につくってくれたのも、ロボットを直してくれたのも、間違いなく父さんだった。

その時、ビニールハウスの入り口の方から、いつもの作業着を身にまとった父さんがやってくるのが見えた。

「どうだった畑は？」

両手をぎゅっと握りしめ、神様の審判を待つような悲痛な表情のまま、母さんは父さんを見ている。

「予想通り、結構ひどい状態だな。特にインゲンとキュウリは、回復は見込めないだろう。見ての通り、このミニトマトも駄目そうだ」

父さんは心なしかうなだれて、苦しげなため息をひとつ吐き出した。

「そう……」

悲しそうな母さんの短い返事を耳にして、俺の胸に、おそらく父さんと母さんが感じているはずの、心臓をじんわりと握られたようなやるせない痛みが広がった。

「でも、オクラとモロヘイヤはそのうち復活すると思う。あいつらは風に強いから。全てが最悪だったわけじゃない」

母さんを元気づけるように、父さんが力強く言った。

「まあ、そうね。毎年のことよ。沈んでばかりはいられないね。台風を乗り切った子たちのことを、しっかり考えてあげないと」

母さんが無理に作った笑顔は、返って余計に寂そうだった。

「まだひとつ確認が済んでない」

重い空気を振り払うように言い、不意に父さんがドラム缶に近づいた。

「おい勇登、手伝え」

畝をまたいでドラム缶の反対側に行き、父さんは俺に手招きする。

俺は父さんと二人でドラム缶を持ち上げた。半分とはいえ、重いし持ちにくい。よくこんなものを一人であの暴風雨の中ここまで運んだものだ。今更のように感心する。

ドラム缶をどけるとそこには、台風一過の朝日を受け、きらきらと輝く長ナスがあつた。そこだけは台風など最初から来なかつたかのようだ。たつぷりと水を吸い、紫色の小さな実はむしろ前より生き生きしている。

「大丈夫だったようだな」

転んでも泣かなかつた子供を褒めるように、父さんは嬉しそうにつぶやいた。

「よく思いついたね。ドラム缶とは恐れ入ったわ」

母さんは頬を高揚させた。確かにこれなら重くて、台風でも飛ばすことは出来ないだろう。

「いや、晩飯を食つてたら急にひらめいてな」

父さんは母さんと話しながら、俺と二人で残りの二つのドラム缶をどけた。残りの二株も無事な姿を見せてくれた。

「でも、大変だったでしょ？ 三つとはいえひとりじゃ」

「いや大したことない。それより、勇登……」

父さんは風で飛ばないように紐で束ねて畝間に置かれた支柱を指差した。

「お前、この長ナスを守ろうとして囲って固定したんだろう？」

「え、まあね」

俺は何だか照れくさく思いながら、斜めにうなずいた。

「えっ、そうだったんだ」

母さんの細い目が、倍の大きさに膨らんだ。それから長ナスのそばにしゃみこんで、愛しそうに葉に触れた。

「……何か、あの後さ、無性に悔しくなって、何か出来ないかなーと思ってさ」
気恥ずかしくなって、俺は鼻を掻いた。

「夕方、お前がこいつを囲ったのに気付いて、俺も守ってやりたくなってな……」
やっぱり鼻の頭を掻きながら、ちよつと照れたように父さんが目線をそらす。それにしてもドラム缶をナスに丸ごと被せるとは大胆だ。俺にはまねできない。

「うふふ。長ナスを守りたいのもあっただろうけど、一番は、勇登の気持ちを守りたかったじゃない？」

振り返って、今度は心からの笑顔で母さんは笑った。

父さんはかすかに唸っただけで、何も答えない。

じんわり目頭が熱くなって、俺もしばらく何も言えなかった。

「これさ、俺が世話をするよ。少なくとも夏休みの間はね。いい？」

何度も瞬きをして涙を乾かしてから、俺は切りだした。

「ま、そうね。あなたが種を播いたんだし。しっかり面倒を見なさいよ」

よいしょとばかりに母さんは立ち上がって、俺にうなずきかけた。

「そうだな。長ナスも喜ぶ。——だが、言っとく。俺はお前に農業を継いでもらいたいとは思ってない。俺はただ、お前が自分で見つけてこれと思った事に、一生懸命取り組んでもらいたいだけだ。それが何だって構わない。何かに夢中になってるお前の姿が見たいんだ」

何となく湿って光って見える父さんの目を見返しながら、俺は大きくうなずいた。乾いたはずの自分の瞳が、またうるんでいくのがわかった。頭を下げて隠そうとしたけれど、きつと二人とも気が付いたに違いない。でも見られたってかまわない。この涙は、きつと隠さなくたっていい涙なんだ。俺はそう思い直した。

その後、朝食をとりながら、俺は大悟にラインをした。

《返信遅くなってゴメン。台風でばたばたしててさ。そっちは被害どうだった？ こっちは結構やられちゃったよ。でもしっかり守れた物もあったから、よしとしなくちゃな》

スマホ画面の上で、ナスのスタンプが踊っていた。

たいふういっか
台風一家

2024 年 10 月 26 日 発行

著者 ながいなすび
長井那寿美

令和 6 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。

ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとし。

また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

農家の息子で深い理由もなく農業高校に通う勇登。久しく会話をしていなかった父の台風対策を手伝うことになり、畑へと出ることになった。そこには実習で勇登が持ち帰ったナスの苗があり……。農作業を通して描かれる、温かな親子の話。

